琉球大学学術リポジトリ

鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言フォネーム（上）

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久, かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2290

鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム（上）

かりまたしげひさ

1．諸鈍方言のリズム＝アクセント的構造

上村幸雄1989 c によると、単語は音韻論的につぎの 4 種類の構造をもっている。

(1)フォネーム的構造

(2)音節的構造

(3)リズム的構造

(4)アクセント的構造

4 種類の構造は層をなし、フォネーム的構造は音節的構造の内部構造を形づくり、音節的構造はフォネーム的構造を基礎にして成立している。リズム的構造は長短の音節によって構成され、音節的構造がリズム的構造の基礎となる。また、アクセント的構造はリズム的構造を基礎にして成立している。これら 4 種の構造は階層づけられ、相互に依存し、相互にはたらきかけあっている。言語の歴史において、上部構造の変化が下位構造の変化をまねいたり、構成要素である下位構造の変化が上部構造の変化をひきおこしたりという、相互の干渉があり、単語の音韻論的構造を変化させるのである。

鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍の方言（以下単に諸鈍方言とよぶ）においては、前後するフォネームとの syntagmatic な関係、および他の同種のフォネームとの paladigmatic な関係のなかでフォネームが phonematic な条件によって変化し、その結果、音節的構造やリズム的構造、ときにはアクセント的構造までもが変化したりする。逆に、一定のリズム＝アクセント的構造のなかで、すなわち、prosodic な条件によってフォネームの変化が決定づけられたりすることがある。

上村幸雄1983、上村幸雄1989a の方法にならって諸鈍方言の単語のリズム＝アクセント的構造について概観する。[注1]

諸鈍方言にはつぎにみられるようなリズム構造のタイプ、すなわち、脚（foot）

のタイプがあり、それぞれの脚ごとに acute accent と grave accent のふたつのタイプのアクセント型の対立がみられる。○はみじかい音節をあらわし、◯はながい音節をあらわす。○は弱音節であり、◯は一般には強音節である。○は子音と短母音からなる開音節（CV）であるが、◯は開音節（CV:）と閉音節（CVC）がある。

表①

	脚のタイプ	acute accent	grave accent
1音節		ˊ◯	ˇ◯
2音節	trochaic	◯˥○	ˊ◯˩○
	iambic	○ˊ◯	○ˇ◯
	spondaic	◯˥◯	◯ˇ◯
3音節	amphibrachic	○˩◯˥○	○ˊ◯˩○
	bacchic	○˩◯˥◯	○˩◯ˇ◯
	anapestic	○○ˊ◯	
	dactylic	◯˥○○	◯˥○˩○
	cretic	◯˥○◯	◯˥○ˇ◯
	anti-bacchic	◯˥◯○	◯˥◯˩○
	molossus	◯˥◯ˊ◯	

脚とは、2音節以上の多音節語において、単語を構成する長短の音節のくみあわせのタイプのことである。また、acute accent、grave accent というのは上村幸雄1986によるとつぎのようなものである。

音声のたかさが支配的であるにせよ、音声のつよさが支配的であるにせよ、その両者が随伴関係にあるような単語アクセントが存在するばあい、聴覚的なたかさ（pitch）をたかく、すなわち、音響的には基本周波数

(fundamental frequency)をおおきくし、かつ聴覚的なきこえ(loudness)をおおきく、すなわち、音響的には波形の振幅（intensity）をおおきくするための積極的な調音的な努力がなされる型のアクセントを acute accent とよぶことにする。このような型のアクセントのばあい一般的には呼吸筋、および／もしくは声帯をはじめとする発声に関与する喉頭の諸筋肉のよりおおきい緊張によって声はたかめられ、かつ、つよめられる。反対にこれらの筋肉の弛緩、もしくはよりちいさい緊張によって、声はひくくなり、かつよわくなる。

一方、聴覚的なたかさをひくくするために、呼吸筋、および／もしくは声帯をはじめとする発声に関与する喉頭の諸筋肉をよりおおきく緊張させる型のアクセントがある。このような型のアクセントを grave accent とよぶことにする。そして grave accent においては、呼吸筋、および／もしくは喉頭の筋肉の弛緩、もしくはよりちいさい緊張によって、声はたかくなる。

諸鈍方言のばあい、一音節語は短い音節の○ではなく、長い音節の◯である。そのフォネーム構造はCV：、あるいはCVCである。CV：のばあい、grave accent（上昇調）の単語については話者もその母音がながいと感じ、acute accent（下降調）については、その母音が短いと感じる話者がいらっしゃる。音韻論的には、母音の長さは問題にならず、この開音節の単語は○と解釈することも可能であろう。しかし、リズム＝アクセント的構造のうえで、grave accent の単語も acute accent の単語もCVCの単語と等価であり、◯と解釈すべきであろう。他の琉球諸方言のばあいにも○という短い一音節の単語がなく、最小の長さの単語が◯であることからも◯とするのは妥当であろう。

諸鈍方言には、○○（pyrric)、あるいは、○○○（tribrach）のようなみじかい音節の連続だけからなる単語はみられない。諸鈍方言のリズム構造上特徴的なのは強音節◯と弱音節○が弱強（弱強)、あるいは強弱（強弱）と交互にあらわれることである。

◯◯、あるいは◯◯◯のようにながい音節だけで構成されるリズ

ム的構造において他の音節との相関関係のなかで、◯が弱音節となることがある。たとえば、〔ˋt'at〕「二つ」という acute accent の単語が「一つも二つも同じだ」のならべの構造のなかにあらわれる〔－m〕「～も」という係助詞をともなった文法的な形は、〔t'a:˥t'ïm〕であるが、「一つで十分だとおもったのに、二つもある。」のように強調をうけるときには〔t'a:ˋt'ïm〕となる。前者も後者も spondaic のacute accent であるが、前者は強弱のリズム的構造であり、後者は弱強のリズム的構造である。

このような諸鈍方言のリズム＝アクセント的構造は母音を核（音節主音）とするフォネーム構造、および音節構造によって形づくられているのであるが、逆に、フォネームも、このようなリズム＝アクセント的構造のなかで、その構造に影響されて存在している。

2．諸鈍方言のフォネーム [注2]

諸鈍方言のフォネームは以下にしめすとおりである。

母音フォネーム

みじか母音フォネーム（7個）

i　e　a　o　u　ï　ë

なが母音フォネーム（7個）

i:　e:　a:　o:　u:　ï:　ë:

子音フォネーム

口蓋音化も唇音化も特徴としない子音フォネーム（15個）

ʔ　'　h　k'　k‘　g　t'　t‘　d　p　b　s　n　m　r

口蓋音化を特徴とする子音フォネーム　（15個）

ʔj　'j　hj　k'j　k‘j　gj　pj　bj　t'ʃ　t‘ʃ　dʒ　ʃ　nj　mj　rj

唇音化を特徴とする子音フォネーム　（6個）

ʔw　'w　hw　k'w　k'w　gw

諸鈍方言の母音フォネームは、(1)長短の区別が語頭以外の音節でみられないこと、(2)標準語の母音／ａｉｕｅｏ／以外の２個の中舌母音／ｉ ë／がある、

などの特徴をもち、子音フォネームは、(1)破裂音、半母音に喉頭音化した子音フォネームと喉頭音化しない子音フォネームの対立がみられること、(2)音節をとじる位置に子音フォネームがきて、閉音節構造の音節をつくること、などの特徴をもっている。

2．1．母音フォネーム

諸鈍方言における母音の長短の対立は、単語のリズム＝アクセント的構造の影響のもとに、とりわけリズム＝音節的構造の影響のもとにそれに左右されながら、すくなくとも2音節以上の多音節語の語頭の音節においてのみあらわれる。第二音節目以降において母音は長短の対立をもたないようである。特に最後の音節が弱の開音節（CV)、すなわち母音でおわる単語のばあい、母音が多少ながく聞こえる。これは語末で筋肉が自然に弛緩して終了し、余韻を残しながらきえていくのが母音をのばしているようにきこえるためだと思われる。ここでは母音の長短の区別をうしなってしまうのである。

たとえば、[ˋ m a k「ra] （枕）のような grave accent の2音節の単語の末尾の音節［ra］は多少ながく［ra:］のように聞こえるが、もし、第二音節目がながければ、その脚は spondaic となり、そのリズム＝アクセント的型は「◯ˇ◯のように第一音節目は高平で、第二音節目が中国語の3声のような上昇調のアクセントで、リズム的には弱強でなければならない。ˋ◯「◯のようなリズム＝アクセント的構造の型はないのである。ところが、[ˋmak「ra] のアクセントは、第一音節目が下降調で、第二音節目は軽く上昇する。ˋ◯「○のようなリズム＝アクセント的型である。すなわち、2音節語以上の末尾の音節がながい音節◯であるばあい、かならず閉音節（CVC）の音節となり、開音節の音節のばあい、かならずみじかい音節○である。

3音節の amphibrachic の○ˋ◯「○と bacchic ○「◯ˇ◯とのあいだにも、また、dactylic の◯¬○「○とcretic の◯¬○ˇ◯とのあいだにもおなじことがいえる。

[k'u「ga:¬nim]（黄金も）のような bacchic の acute accent の単語は、

文の中で強調されたとき、[k'uga^{h}nim] というanapestic の形になる。前者が弱強弱のリズム型なのに対して、後者は弱弱強のリズム型になる。いずれも第二音節目は開音節であるが、前者は強音節で母音がながくなり、後者は弱音節で母音がみじかくなる。このように、母音のながさは単語のリズム＝アクセント的構造のなかで、それに依存して長くなったり短くなったり、その長短の区別が問題にならなくなったりするのである。

語頭での母音の長短の対立については、つぎの単語のなかにはっきりとみることができる。リズム＝アクセント的構造に左右されずに母音の長短の対立を確認するためには、リズム的構造もアクセント的構造もおなじでなければならないだろう。つぎの単語はいずれも acute accent で、弱強のリズム的型の単語である。

i	〔mi^{h} k'ër〕	三回
i:	〔mi:^{h} t'ïm〕	三つも
a	〔ja^{h} k'ër〕	八回
a:	〔ja:^{h} t'ïm〕	八つも
u	〔ju^{h} k'ër〕	四回
u:	〔ju:^{h} t'ïm〕	四つも [注3]

もうひとつ、母音のながさの問題で特に注意しなければならないことは、強音節◯において、開音節構造では〔CV:〕のようにながが母音、もしくは、〔CV:〕のように半なが母音であり、閉音節構造では〔CV:C〕のように半なが母音、もしくは、〔CVC〕のようにみじか母音であることである。これは acute accent 、grave accent のいずれのアクセント型においても同様である。例をあげるとき、開音節の強音節◯の単語を／CV:／、閉音節の強音節◯の単語を／CVC／のように表記する。また、開音節の弱音節の単語は、／CV／のように表記する。音韻対応・音韻変化について述べるとき、この母音のながさを無視することがある。

標準語と諸鈍方言とのみじか母音の対応は以下のとおりである。この音韻対応は基本的、概略的なものであり、条件によって異なる。

標準語　　諸鈍方言

／a／—／a／

／i ／—／i ／

／u／—／u／

／e／—／ï ／

／o／－／u／，／o／

※この「標準語」というのは話し言葉としての日本語標準語をさす。音韻対応について述べるときに特にことわらないで、古代日本語についていうこともある。音韻史の観点からは古代日本語との音韻対応の方が諸鈍方言におこった音韻変化の現象を説明するのに便利なことがあるからである。

2．1．1．前舌狭母音／i ／／i:／

諸鈍方言の／i ／〔i〕は、標準語の／i／とほとんど同じように調音される。標準語の／i ／に対応してあらわれる。

標準語　　諸鈍方言

／i ／—／ʔi／〔ˈʔiʃ〕石、〔ʔiᵛk'i:〕息

／ki／—／k'i／〔k'iᵛmo:〕肝、〔ʔaᵛk'i:〕秋

／gi ／—／gi／〔muᵛgi:〕麦

／si ／—／si／〔ʃiᵛru:〕汁、〔ʃiᵛwas〕師走

／ci ／—／t'ʃi／〔ᵛt'ʃi:〕血

／zi ／—／dʒi／〔hiᵛdʒi:〕肘、〔ᵛdʒi:〕地，字

／ni ／—／ni／〔niˈdʒu:〕二十、〔ˈniʃ〕西

／hi ／—／hi／〔ˈhi:〕日、〔hiˈgjaʃ〕東

／bi ／—／bi／〔ˈbim「bo〕貧乏

／mi ／—／mi／〔ˈmitʃ〕道、〔ʔuᵛmi:〕海

／ri ／—／ri／〔haᵛri:〕針

／wi ／—／'i／〔jiˈrjum〕坐る

標準語のイ段の音節の母音は諸鈍方言において脱落し、子音おわりの音節

（閉音節）をつくっている。

標準語　　諸鈍方言

/ki/—/k/　〔ˋjuk〕雪

/gi/—/k/　〔ˋkuk〕釘

/si/—/ʃ/　〔ˋʔiʃ〕石、〔ˋʔuʃ˩rjo〕後ろ

/ci/—/tʃ/　〔ˋmitʃ〕道、

/zi/—/tʃ/　〔ˋgutʃ˩rja〕鯨

/ni/—/n/　〔ˋgan〕蟹

/bi/—/p/　〔ˋk'up〕首

/mi/—/m/〔ˋmim〕耳

/ri/—/r/　〔ˋt'ur〕鳥、〔ˋhar〕針

琉球方言のばあい、標準語の/i/に対応する前舌狭母音/i/は、後続する子音を口蓋音化（palatalize）させる。これは琉球方言全体にみられるものであるが、諸鈍方言のばあい、特に顕著にみられる。

この口蓋音化現象（palatalization）はみじかい母音/i/のときだけおこるものであり、ながい母音/i:/は口蓋音化現象をおこさせないようである。この口蓋音化現象が『おもろさうし』においてあらわれることも琉球方言研究者にはよく知られている。

これまでの調査で口蓋音化の現象がみられるのは、うしろにつづく音節がいずれも広母音a、半広母音e，oを含む標準語のア段、エ段、オ段の音節に対応するものにかぎられている。

(1)うしろにつづく音節が広母音*aをふくむばあい

〔ʔiˋk'ja:〕　　烏賊（いか）

〔ni˩gja:ˋʔur〕　にがうり

〔miˇt'ʃa:〕　　土（みた）

〔hiˇdʒar〕　　左

〔miˇnja:〕　　貝（みな）

〔ʃiᵛrjam〕　　しらみ

(2)うしろにつづく音節が半広母音 * o をふくむばあい

〔ʔiᵛʃo:〕　　磯

〔miᵛt'ʃu:〕　　三年（みとせ）

〔miᵛnjo:〕　　蓑

〔k'iᵛnju:〕　　昨日

〔dʒiᵛrju:〕　　囲炉裏（地炉）

(3)うしろにつづく音節が半広母音 *e をふくむばあい

〔ʔiᵛk'i:〕 池

〔hiᵛgi:〕 髭

〔ʔiᵛni:〕 稲

〔k'iᵛʃir〕 きせる、〔ᵛmiʃ「gi〕 しゃもじ（飯櫂）

この(3)のとき、子音が口蓋音化するだけでなく、その口蓋音化した子音はうしろにつづく母音にも影響をあたえる。例にあげた「髭」「稲」「池」には、母音／i ／に後続する音節に *e を含んでいて、それは諸鈍方言と標準語の規則的な音韻対応では／ï ／であらわれるはずであるが、先行する母音／i ／の同化作用（順行同化）によって／i ／に変化している。

単語内の音節だけでなく、単語に接続する格助辞やとりたて助辞も口蓋音化する。

ha「t'atʃ¬nju　　二十歳が

t'un¬nju　　鳥が

t'i:¬t'ad「dʒu　　ついたちぞ

*i は特定のリズム＝アクセント的構造とかかわって脱落し、閉音節構造の単語を諸鈍方言のなかに発生させたが、その脱落にさきだって、後につづく子音を口蓋音化させたようである。

ʔiʃᵛgjak　　石垣

t'ir¬gjo　　井戸〔釣り川〕

ᵛgutʃ「rja　　鯨

ᵛʔuʃ「rjo　　後ろ

ʔad˥ dʒa˩ha　下駄〔あしだか〕

（補注）首里方言などおおくの沖縄中南部方言では, nj、mj、rj などは直音化してn やm、r になったり、kj , gj などの一部の口蓋音化した子音は破擦音化してtʃ, dʒに変化したため、口蓋音化した子音フォネームはすくない。この直音化や破擦音化の現象は諸鈍方言にはみられない。（あるいは一部の単語や音節は口蓋音化がおこっていないのかもしれない。）

dʒi:ru	囲炉裏〔地炉〕
nna	貝（みな）
ʃiraŋ	シラミ
ʔitʃa	烏賊（いか）
'ndʒasaŋ	苦い

また、首里方言では母音／i ／は先行する子音を口蓋音化させ、さらに破擦音化させるが、諸鈍方言では、破擦音化の現象はみられない。諸鈍方言の *i は順行同化現象（progressive assimilation）によって後続の子音を口蓋音化させることはあっても、逆行同化現象（reprogressive assimilation）によって先行する子音を破擦音化させることはないようである。

tʃinu:	昨日
hidʒi	髭

2．1．2．中舌狭母音／ï ／／ï:／

この母音は、諸鈍方言をふくむ奄美・徳之島方言グループに特徴的な母音である。中舌狭母音／i ／／ï:／は、標準語（「古代日本語」）のエ段の音節の母音／e ／とウ段の音節のうちの「ス」「ツ」「ズ（ヅ）」の母音／u ／に対応してあらわれ、イ段の音節の母音の／i ／とははっきり区別される。これは沖縄本島とその周辺離島の諸方言でイ段の音節の母音とエ段の音節の母音がともに／i ／に統一しているのと異なり、北琉球方言の母音体系のふるい姿を保存しているのである。

(1)標準語の／e／に対応してあらわれる諸鈍方言の／ï／

標準語	諸鈍方言
／ke／—／k'ï／	〔ᵛk'ï:〕毛
／ge／—／gï／	〔haᵛgï:〕禿げ
／se／—／sï／	〔ʔaᵛsï:〕汗
／ze／—／dï／	〔k'aᵗdï:〕風
／te／—／t'ï／	〔ᵗt'ïn〕空（天）、〔ᵛt'ï:〕手
／de／—／dï／	〔ʔuᵛdï:〕腕
／ne／—／nï／	〔t'aᵛnï:〕種、〔ᵛnï:〕根
／he／—／hï／	
／be／—／bï／	〔naᵛbï:〕鍋
／me／—／mï／	〔ᵛmï:〕目、〔k'uᵛmï:〕米
／re／—／rï／	〔haᵛrï:〕針
対応の例外	
／we／—／ji／	〔jiᵛdï:〕絵図
／e／——／ʔi／	〔ᵗʔip〕海老
／'i／	〔ᵗji:〕柄、〔ᵗjin〕縁

標準語の「エ」には／ʔi／と／'i／が対応する。語例がすくなく、断定はできないが、前者は上代日本語のア行の「エ」〔e〕に対応し、後者はヤ行の「エ」／je／に対応していると推測される。これは、上代の万葉仮名で区別され、中世（平安）中期頃までに区別されていたものを琉球方言（厳密には語頭の喉頭化音をもつ北琉球方言）が区別しているということになるのであろう。

古代日本語			諸鈍方言
海老	えび	*ebi	ᵗʔip
柄	え	*ye	ᵗji:

(2)標準語の／u／に対応してあらわれる諸鈍方言の／ï／

／su／—／sï／〔ᵛsï:〕巣、〔ᵗsïk〕鋤、犂

／cu／—／t'ï／〔t'ïᵗmï:〕爪、〔ʔiᵛt'ït〕五つ

／zu／—／dï／〔nïᵛdïm〕鼠

〔k‘a˩˥ na:˥˧ dïtʃ〕金槌

（注）ツ〔tsu〕に対応する／t’ï／とテ〔te〕に対応する／t‘ï／とは喉頭音化した／t’／と喉頭音化しない／t‘／との対立によって区別を保存している。セ〔se〕とス〔su〕は〔sï〕に統一され、デ〔de〕とヅ〔dzu〕は／dï／に統一されて、エ段とウ段の音節の区別をうしなっている。

その他の母音と対応する中舌狭母音／ï／

①〔sï̥ˇt’a:〕砂糖、〔sï̥ˇt’u:〕外

②〔ˇk‘ï:〕木、〔ˋmït〕水

〔mïˇmït〕ミミズ

①は広母音／a／、および、半広母音／o／が無声化し、その音色が曖昧化した結果、中舌母音／ï／に変化したのであろう。

②は、琉球方言全体にみられる共通の問題で、とくに「木」に対応する上代の日本語がイ列乙類の母音をふくむことから、上代日本語の母音体系との直接の対応関係をみとめる研究者もいるが、例外も多く、まだ明確なことはいえない。

中舌母音／ï／は、唇を調音点とする子音フォネーム／m, p, b, w, hw／、および奥舌を調音点とする子音／k‘, g, k‘w, gw／と結合したとき、くらい音色のバリアントである。また、この中舌母音／ï／は，舌先を調音点とする子音フォネーム／t‘, t’, d, n, r, s／と結合したとき，あかるい音色のバリアントである。舌先を調音点とする子音フォネームと結合した／ï／は、〔ï〕～〔ɪ〕～〔i〕という範囲でゆれていて、〔ï〕はていねいな発音のとき以外にはあまりきかれず、〔ɪ〕がおおく発音される。／ï／は舌先の子音フォネームと結合するとき、中舌的な母音から前舌的な母音〔i〕にちかづいていく傾向がある。とりわけ／t‘ï, t’ï, dï／の音節には対立する／t‘i, t’i, di／のような音節がないためにその傾向が著しい。また、／ï／が／n, r, s／に結合した音節と、／i／が／n, r, s／に結合した音節は、母音の音色の上ではかなりちかづいていて、聞き分けにくいのであるが、前者の音節では子音が口蓋音化していないのに対して、後者の音節のばあい〔nji, rji, ʃi〕のように子音が

口蓋音化していて、そこにわずかなちがいがあらわれてくる。この中舌母音／ï／は，口蓋音化した子音フォネーム／ʔj, 'j, hj, k'j, k'j, gj, ʃ, zj, nj, rj, mj／とは結合しない。

2．1．3．奥舌狭母音／u／／u:／

諸鈍方言の奥舌狭母音の／u／〔u〕は円唇の母音である。この奥舌狭母音は、標準語の／u／、および／o／に対応してあらわれる。

標準語　　諸鈍方言

／u／——／ʔu／〔ˋʔuʃ〕牛、〔ʔuˇra:〕裏

／ku／—／k'u／〔ˋk'utʃ〕口、〔ˋk'up〕首

／gu／—／gu／

／nu／—／nu／〔ˇnuʃ〕主、〔nuˋno:〕布

／hu／—／hu／〔huˇnï:〕船、〔hu̥ˇt'a:〕蓋

／bu／—／bu／

／mu／—／mu／〔muˇra:〕村、〔muˇk'aʃ〕昔

／ju／—／ju／〔ˇju:〕湯、〔ˋjuk〕雪

／ru／—／ru／〔saˇru:〕猿、〔haˇru:〕春

標準語の／su／、／cu／、／zu／に対応する諸鈍方言の音節は／sï／、／t'ï／、／dï／である。

標準語の／o／に対応してあらわれる諸鈍方言の／u／は以下のとおりである。

標準語　　諸鈍方言

／o／——／ʔu／〔ʔuˋt'u:〕音

／ko／—／k'u／〔ˋk'uʃ〕腰、〔k'uˇji:〕声

／go／—／gu／〔guˋma:〕胡麻、〔guˇmi:〕ゴミ

／so／—／su／〔suˋk'u:〕底

／zo／—／du／〔k'uˇdu:〕去年（こぞ）

／to／—／t'u／〔ʔuˋt'u:〕音

／do／—／du／〔duˇru:〕泥

／ no ／—／ nu ／〔nuᵛmi:〕のみ
／ ho ／—／ hu ／〔Φuᵛnï:〕骨、〔ᵛΦu:〕帆、穂
／ bo ／—／ bu ／〔t'ïᵛbu:〕壺、〔ᵗbun〕盆
／ mo ／—／ mu ／〔ᵗmun〕もの、〔ᵗmum〕籾
／ jo ／—／ ju ／〔juᵛru:〕夜、〔juᵗk'u:〕横
／ ro ／—／ ru ／〔k'uᵛru:〕黒、〔duᵛru:〕泥
／ wo ／—／ 'u ／〔ᵗwun〕斧、〔'utˉt'ï〕一昨日

標準語のウ段の音節の母音は、イ段の母音のばあいと同様に諸鈍方言において脱落し、子音おわりの音節をつくっている。

／ ku ／—／ k ／〔ᵗhukˉro〕袋、〔ᵗmakˉra〕枕
／ gu ／—／ k ／〔ᵛdok〕道具
／ su ／—／ s ／〔ᵗnusˉdo〕盗人
／ cu ／—／ t ／〔ᵗnat〕夏、〔ᵗmit〕三つ
／ zu ／—／ t ／〔ᵗmït〕水
／ nu ／—／ n ／〔ᵗʔin〕犬
／ bu ／—／ p ／〔ᵗʔapˉra〕油
／ mu ／—／ m ／〔ᵗmim〕耳
／ ru ／—／ r ／〔k'i̥ᵛʃir〕煙管、〔ᵗhar〕針

狭母音／i ／／ï ／／u ／は、無声子音に挟まれたばあい無声化し、後ろにきた子音は喉頭音化する傾向がある。

〔sï̥ᵛt'a:〕	砂糖
〔t'ʃu̥ᵛk'a:〕	やかん
〔hu̥ᵗt'a:〕	蓋
〔t'ʃ i̥ˉk'ja:ᵛsam〕	近い

音節を閉じる位置にくる子音フォネームが単語の末尾にきて、外破することがあるが、その子音が口蓋音化しない子音のばあい、外破の気音とともに〔ï̥〕のような音色がきこえ、口蓋音化した子音のばあいは、〔i̥〕のような音色がきこえてくる。しかし、単語のリズム＝アクセント的構造からみると、それを

無声化した母音〔ï̥〕〔i̥〕とみなすことはできない。

音節末の子音が外破し、その気音がきこえることは、諸鈍方言をふくむ瀬戸内町の方言の特徴のひとつであろう。鹿児島県鹿児島市内、およびその周辺の方言にも閉音節構造の単語がおおくみられるが、これらの諸方言の音節末の子音は喉頭音化していて、外破しないことがおおい。おそらく、この喉頭音化していることがこれらの諸方言で音節末の子音を／ʔ／あるいは／Q／に統一させるのであろうとかんがえられる。

○◯ (iambic) で grave accent のリズム＝アクセント的型の単語には、〔「○ˇ◯〕というアクセントと、〔○ˇ◯〕というアクセントの、自由変異の関係にある二つのバリアントがある。このリズム＝アクセント型の単語の第一音節目の音節が無声化したばあい、第一音節目が低くはじまる。第一音節目が高くはじまるバリアントではその母音は無声化しないであらわれやすいという傾向をもっている。

〔「sïˇt'a:〕 ～〔si̥ˇt'a:〕 砂糖

〔「hiˇk'jos〕～〔hi̥ˇk'jos〕 挽臼

2．1．4．前舌半広母音／e ／／e:／

前舌半広母音／e ／は語例がきわめてすくなく、標準語との対応も不明である。この／e ／は口蓋音化した子音フォネームとしか結合しないようである。

／ʃe／〔ˋʃe:「hë〕咳、〔ˇʃen〕千

／bje／〔ˋʃim「bje〕カンパチ

／ʔje／〔ˋʔje:「da〕間

／'je／〔muˋje:〕模合

2．1．5．中舌半広母音／ë ／／ë:／

中舌半広母音／ë ／／ë: ／は，つぎのような音韻変化の結果生じた、半広中舌母音である。

(1)二重母音が融合してできたë

*ae 〔ˋhwe:〕 蠅

〔ˆmë:〕　前

*ai　〔ˆhwë:〕　灰

〔ʔuˆt'u:「gë〕　顎〔おとがい〕

〔t'aˆrë:〕　盥〔たらい〕

(2)諸鈍方言では*kが広母音*aと半広母音*eにはさまれると、／h／に変化するのであるが、そのとき、／h／の両側の母音が同化して二重母音の融合現象に似た音韻変化をおこす。この*k、あるいは／h／をはさんでおこなわれる同化現象は遠隔同化（distance assimiration）とよばれるものである。その際、○◯（iambic）や○◯◯（bacchic），○◯○（amphibrachic）のような、弱強、弱強強、弱強弱のリズム構造をもった単語において、最初のみじかくて弱の音節の中舌母音はせまい／ï／、もしくは／ë／があらわれ、二番目のながくて強の音節の中舌母音はひろい／ë／があらわれる傾向がみられる。

*ake　〔dïˇhë:〕　竹

〔sïˆhë:〕　酒

*oke　〔wïˆhë:〕　桶

〔wï「hë:ˇrjum〕　起きる

(3)先行する音節に広母音／a／があるばあい、つぎの音節の母音が／ï／であらわれるはずのところに半広中舌母音／ë／があらわれる傾向がある。これは、先行母音／a／の影響によるphonematicな条件によるものなのか、前述のような単語のリズム＝アクセント的構造によるprosodicな条件によるものなのか、にわかには決定できない。おそらく両者の相互作用によるものなのであろう。

〔k'aˆdë:〕　風

〔k'aˇgë:〕　影

〔ʔaˇsë:〕　汗

〔t'a「t'a:¬më〕　畳

（注）　以上の(1)〜(3)のうち、(1)のような二重母音の融合によって生じた／ë／は、沖縄中南部方言グループ、沖永良部与論沖縄北部方言グループでは、

／e：／に規則的に変化している。

	諸鈍方言	今帰仁方言	首里方言
蠅	ˋhwë:	ˏpe:	hweˎ:
前	ˋmë:	ˋme:	me:
灰	ˋhwë:	ˏpe:	hwe:

中舌半広母音の／ë／は、唇を調音点とする子音／m, p, b, w, hw／および奥舌を調音点とする子音／k', g, k'w, gw／と結合したとき、くらい音色のバリアントになる。また、この中舌半広母音／ë／は舌先を調音点とする子音／t',t', d, n, r, s／と結合したとき、あかるい音色のバリアントである。

この中舌半広母音／ë／は口蓋音化した子音フォネーム／ʔj, 'j, hj, k'j, gj, k'j, zj, nj, rj, mj／とは結合せず、口蓋音化した子音フォネームと結合する半広母音は前舌半広母音の／e／である。

／nj／〔ˋhanˏnje〕　叔母

／ʃ／〔ʔaˏʃegˎgwa〕姉

〔ˋʃe:ˏhë〕　咳

（注）前舌母音の／i／／e／が口蓋音化した子音フォネームと結合することはのべたが、諸鈍方言においては、口蓋音化した子音フォネームと口蓋音化を特徴としない子音フォネームとはつぎのようなパラレルな対立をなしていると みなすことができるであろう。

ʃi	ʃe	ʃa	ʃo	ʃu
sï	së	sa	so	su

bi	bje	bja	bjo	bju
bï	bë	ba	bo	bu

2．1．6．奥舌半広母音／o／／o：／

琉球方言全体に＊o→uという狭母音化がある。標準語のみじか母音／o／に対応する琉球方言の母音／o／は非常に稀にしかみられず、ほとんどのばあい／u／であらわれてくるのであるが、諸鈍方言において、この＊o→uの

音韻変化は完成されず、いろいろな単語のなかに／o／を保存している。

／ko／—／k'o／〔ʔiˋt'o:「k'o〕いとこ

／ho／〔muᵛho:〕婿

／so／—／so／〔suᵛso:〕裾

／ʃo／〔ʔiᵛʃo:〕磯

／to／—／t'o／〔haᵛt'o:〕鳩、〔ʔaᵛt'o:〕跡、

／do／—／do／〔ˋnus「do〕盗人、〔k'aᵛdo:〕角

／no／—／no／〔t'ïᵛno:〕角、〔nuˋno:〕布

〔ᵛno:〕野

／mo／—／mo／〔muᵛmo:〕股、〔k'uᵛmo:〕雲

〔k'iᵛmo:〕肝

／jo／—／jo／〔maᵛjo:〕眉

／ro／—／ro／〔roˋk'u:「dʒu〕六十

〔ˋhuk「ro〕袋

そのほかにつぎのような条件で／o／／o:／が生じる。

(1)標準語の／o:／のうち、開長音（古代日本語の＊au、のちに＊o:）には諸鈍方言の／o:／が対応し、合長音（古代日本語の＊ou＜＊ehu、および＊eu＜＊ehu、いずれものちに＊o:）には諸鈍方言の／u:／が対応している。

〔ˋbo:〕棒、　〔k'o:ᵛmor〕コウモリ

〔ᵛk'o:〕無尽講、　〔ˋk'otʃ〕麹

〔ᵛmjotʃ〕名字、　〔ro:ᵛsuk〕蠟燭

〔ᵛdu:〕胴、　〔guᵛbu:〕ゴボウ

〔ᵛk'ju:〕今日

〔k'iᵛnju:〕昨日

(2)古代日本語の「アヲ＊awoから変化した＊ao（二重母音）が諸鈍方言では融合して、／o:／であらわれる。

＊ao＞o:

〔ʔo:˥ ʔi˩˧rju〕　青

〔ˡʔo:˩˧sa〕　あおさ（ひとえのり）

〔ˡso:〕　竿

(3) * awa の変化。

* awa が変化して／o:／になるのは、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論、喜界島の諸方言においてであり、沖縄諸島以南では／a:／に変化している。

〔ˡʔo:〕 粟

〔ˡk'o:〕 川

〔ˡk'o:〕　皮

〔ˡno:〕　縄

(4)諸鈍方言では * k が広母音 * a と半広母音 * o にはさまれると、／h ／に変化するのであるが、そのとき、／h ／の両側の母音が同化して二重母音の融合現象に似た音韻変化をおこす。このとき○◯ (iambic) のような、弱強のリズム構造をもった単語において、最初のみじかくて弱の音節にはせま母音の／u ／、あるいはすこしせばめの／o ／があらわれ、二番目のながくて強の音節には半広母音の／o ／があらわれる傾向がみられる。

〔t'uˡho:〕 蛸

〔juˡho:〕　櫂

〔muˡho:〕 婿 [注4]

／o ／が保存されるばあい，前に述べたように prosodic な条件によるものとおもわれる。そのとき、○◯ (iambic) や○◯◯ (bacchic)，○◯○ (amphibrachic) のような、弱強、弱強強、弱強弱のリズム構造をもった単語において、第二番目のながい強の音節に半広母音の／o ／があらわれる傾向がみられる。

2．1．7．広母音／a ／／a:／

広母音／a ／は、諸鈍方言の母音フォネームのなかでもっとも安定したフォネームである。標準語のア段の音節の母音に対応してあらわれる。

／a ／――／ʔa ／〔ʔaˡk'i:〕秋、〔ʔaˡmï:〕雨

／ ka ／—／ k'a ／〔k'a$^{\vee}$t'a:〕肩、〔k'a$^{\vee}$sa:〕笠
／ ga ／—／ ga ／〔k'a$^{\vee}$gam〕鏡
／ sa ／—／ sa ／〔sa$^{\vee}$ra:〕皿、〔sa$^{\vee}$ru:〕猿
／ ta ／—／ t'a ／〔$^{\wedge}$t'a:〕田、
／ da ／—／ da ／〔ha$^{\vee}$da:〕肌、〔ju$^{\wedge}$dar〕涎
／ na ／—／ na ／〔$^{\wedge}$na:〕名、〔na$^{\wedge}$ha:〕中
／ ha ／—／ ha ／〔ha$^{\vee}$na:〕花、鼻
／ ba ／—／ ba ／〔ba$^{\wedge}$ʃa:〕芭蕉、
／ ma ／—／ ma ／〔ma$^{\vee}$mï:〕豆、〔ʔu$^{\vee}$mi:〕海
／ ra ／—／ ra ／〔sa$^{\vee}$ra:〕皿
／ wa ／—／ wa ／〔wa$^{\vee}$ra:〕藁

付記（あとがきにかえて）

諸鈍調査の事の始まりはわたしの学生のころにさかのぼる。

私が大学三年生のとき、琉球大学に赴任して来られた上村幸雄先生が「諸鈍方言辞典」のための録音テープとメモを研究室にもってこられた。諸鈍出身の金久正氏が上村幸雄先生のすすめにしたがって、録音したテープと、それについてかきのこしたメモである。九州帝国大学の英文科を卒業なさり、言語学にも深く関心をもち、服部四郎、上村幸雄両先生のインフォーマントなどもつとめた金久正氏の仕事は見事なものであった。テープは録音状態も悪くなく、読みづらくはあるが、メモものこされており、はやい時期の出版が期待されたが、上村幸雄先生ご自身が多忙であったため、奄美出身で、龍郷町の方言について卒業論文を書いた、上村研究室の円和之君が帰郷後にその文字化のしごとをひきうけることになった。その後彼も多忙となり、しごとは中途になってしまっていた。

わたしは、1983年に沖縄言語研究センターの事務局のしごとをするために沖縄にもどり、その録音テープとメモを上村幸雄先生の研究室で見つけ、保存のために録音テープを移録し、メモをコピーした。大学時代の同級生であった円和之君のしごとをひきつぎ、「諸鈍方言辞典」をはやく活字にしたいとかんが

えていたが、沖縄言語研究センターの事務局の多忙のために実行できないでいた。

1986年、沖縄言語研究センターの共同調査で加計呂麻島をおとずれ、諸鈍にたちよったのをきっかけに学生を引率していくことになった。当初は、金久正氏のテープで調査前の耳ならしをし、調査後は学生に分担させて文字化しようともくろんでいたのだが、諸鈍方言の聞き取りのむつかしさに6年間くらいは微妙な母音の長さやアクセントに悩まされた。今みると、そのころの資料はまるでつかいものにならない。

上村幸雄先生が「単語のリズム－アクセント的構造の分析方法について－今帰仁与那嶺方言を例として－」「acute accent とgrave accent」のふたつの論文で示した方法を諸鈍方言に応用しはじめたあたりから、諸鈍方言の音韻の様子がみえてきた。

1986年に国語国文学野外実習の講義で学生と一緒に諸鈍にいきはじめてから今年で8年目である。年に一回、多い年には2回でかけたこともあった。回数の割にえられた資料はとても少ない。「遅々として進まず」の感が強いが、学生の入門的な講義として位置づけているので、確実な資料を得るために何度も同じ単語を調査させた結果である。

諸鈍方言は、2種類の中舌母音と喉頭化音と閉音節の末尾の子音を聞き分けること、単語のリズム＝アクセント型を確認しながら、母音の長さを聞き分けることなど、学生たちにはちょうどいい難しさである。また、飛行機とバスと船を利用して一日がかりで出掛ける離島僻地での臨地調査は受験勉強しかしてこなかった学生たちには良い刺激となっているようだし、九十歳を超えて人生を達観し、それでいて、まだまだ元気な、生きる意欲をもった現地の老人たちとの語らいは現代っ子の学生たちに何よりの勉強になっているようである。

例年とも1年生から4年生までの学生が10人内外、そして卒業生が多いときに2，3人参加する。冨高康一（沖縄県立与勝高校教諭）は最初の調査から欠かさず参加している。ここにあげたおおくの資料は、その学生たちが調査してきたものである。

最後になったが、調査に際しては主としてつぎの方々から方言をおしえてい

ただいた。

昭山時男（明治38年生）

吉川彦一（明治39年生・故人）

吉川　忠（明治39年生）

いずれも「諸鈍シバヤ」の伝承者たちで、毎年わたしたちのくるのを心待ちにしてくださっている。去年、「彦一じいさん」が亡くなられた。昭山時男さんと吉川忠さんが元気でいる間は、諸鈍での調査をつづけたいとかんがえている。その他おおくの諸鈍の方々にお世話になった。感謝もうしあげる。

注1. 諸鈍方言の単語のリズム＝アクセント的構造については、かりまた他三名1992に詳しいのでそれをご覧いただきたい。

注2.「フォネーム」「音節」などの音韻論上の基本的な概念については上村幸雄1978にしたがっている。ただし、諸鈍方言の子音フォネームは、標準語の子音フォネームとちがい、子音フォネームそれのみで有意味的な単位（たとえば、助詞－m（係助詞「も」に相当）となりうるという機能上の特徴をもっている。

注3.　◯◯（spondaic）にはこの〔ju:ˆt'ïm〕というアクセント型のほかに〔ju:˥t'ïm〕というアクセント型があるが、前者が文法的な強調形で、後者が強調をうけない一般的な形である。このような文法的に強調をうけたバリアントをもつリズム＝アクセント的型には、bacchicの／○「◯˥◯／に対するanapesticの／○○ˆ◯／がある。

注4.「木」は上代の日本語ではイ列乙類の音節で、諸鈍方言の基本的な音韻対応から判断すると＊keにさかのぼると推測される。一方、「水」の「ミ」はイ列甲類の音節であるが、諸鈍方言の基本的な音韻対応からは、これも＊meにさかのぼると推測される。中舌狭母音／ï／と前舌狭母音／i／とが対立するような方言、あるいは、エ段とイ段（このばあい「メ」と「ミ」）の区別を保存しているような方言（たとえば、伊江島方言）などでも結果はおなじである。

注5.「婿」に対応する〔muˇho:〕の第二音節目の＊kがhに変化しているということから、第一音節目の母音も＊oであったことが推測される。因みに『おもろさうし』にも「もこ」と記載されている。

【参考文献】

上村幸雄1959　奄美大島諸鈍方言の音韻について
（日本コトバの会方言部会発表レジメ）

〃　1983　単語のリズム－アクセント的構造の分析方法について
－今帰仁与那嶺方言を例として－
（沖縄言語研究センター資料№39）

〃　1978　現代日本語の音韻体系
（『日本語研究の方法』むぎ書房）

〃　1987　音韻変化はどのようにひきおこされるか
－英語の　Grate Vowel Shift　についての考察－
（沖縄言語研究センター資料№67）

〃　1989a　acute accent と grave accent
（『日本語音声』研究報告1. 成果報告書1989. 総括班）

〃　1989b 音韻変化はどのようにひきおこされるか(2)
－琉球列島諸方言のばあい－
（沖縄言語研究センター資料№79）

〃　1989c 日本語のイントネーション
（『ことばの科学３』むぎ書房）

〃　1992　琉球列島の言語（総説）
（『言語学大辞典（世界言語編）』第４巻）

かりまたしげひさ・冨高康一・長嶺明子・金庸珏　1992
鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言における単語のリズム＝アクセント的構造について
（『文部省重点領域『日本語音声』琉球列島班成果報告書』）

かりまたしげひさ・冨高康一　1992
鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネームについてのおぼえがき
（『沖縄文化』第27巻2号）